

加わり、全滅したことを思う。二人の兄が私の身代わりになってくれたものと、七十四歳になった今でも兄の墓参をする時、私の軍隊生活の数々が走馬燈のように私の脳裡を走ります。

―数奇な体験ですが、馬の事故死が無く、任官したり、現役志願し下士官になっていたら、恐らく、ルソンへ行つて玉碎したことでしょう。二人の兄さんに助けられたことですね。

## 私の戦中、戦後の思い出

山口県 森重 清

―本日はお忙しいところを御出で下さいまして有難うございます。森重さんは、どちらへ行かれましたか。

私は大正十三年生まれです。支那事変に引き続く大東亜戦争の開戦に伴って、私等中学生も昭和十六年十二月に繰り上げ卒業になりましたが、満二十歳までの

三年間は今の三菱レイヨン、当時は日本化成という会社勤めていました。

月給五〇円でした。昭和十九年に満二十歳になり、徴兵検査を山口県柳井町で受けましたが第二乙種合格でした。

―その頃は第二乙でも現役入隊になったんですね。はい。ですから昭和十九年の十月一日に広島第五師団輜重兵第五連隊（第十部隊）に仮入隊し、赤飯でお祝いして貰った時は嬉しかったですね。

一週間たったら満州第一三三一部隊（第一一二師団工兵隊）に転属となり、満州から新兵受領にきた軍人に引率されて宇品から軍用船に乗せられ、満州東南部のソ満国境に近い琿春の部隊に着いた時も、二、三日は赤飯が飯上げになり、このような献立てが続いたので軍隊という所は案に相違して御馳走してくれる良いところだなと思いました。実は赤飯だと思ったのは高粱（コウリヤン）飯だったんですがね。

新兵を迎えて、お客様扱いも二日間だけ、そのあとは事あるごとに「貴様らは一銭五厘でいくらでも補充

がくるが、馬の方が貴様らよりも大切なんだ」と怒鳴られてピンタの嵐で鍛えられましたよ。

輻重兵の一期教育は、先ず自分のことは後廻し、厩に早駆けで馬の世話することが一番先、馬の寝わらを掻き出し馬糞の始末、水飼い等がすんで、やっと朝食をとるんですから歩兵なんかと比べると雲泥の差ですね。

この部隊は沖縄に転用された部隊の残留者を基幹に最近編成されたものらしく、あちこちの寄せ集めの兵隊ですから気合の点では今一つでしたが、何と云っても関東軍の気合は未だ残っていましたからピンタは凄かったですね。私は入隊する時は眼鏡の予備共に三ツ持って出たんですが、酷寒零下二〇度の琿春ですからセルロイド製の眼鏡枠が凍って折れ易くなっている所へピンタですから、たちまち一つだけになってしまいました。

眼鏡をかけている者にとって眼鏡がないのは致命傷です。幸い私の姉がチチハルに住んでいたものですから早速送ってもらいましたので助かった思いがしたの

を思い出します。古年兵はズーズー弁でしたから東北か新潟の出身の人でしょう。

私が入隊した留守宅には日本化成から月給の半分二十五円が毎月届けられていたそうですから大分助かったようです。

—そういう点は役所とか大きな会社は違っていたようですね。新兵のうちは人間扱いされなかったと思います。新兵のうちには人間扱いされなかったと思います。新兵教育については、終戦後いろいろと行き過ぎな点が指摘されていますが、責任感、中でも共同責任、上司に対する言葉使い等については良い教育を受けたと思います。良い意味での軍隊生活を受けていれば、現在よく新聞紙上を賑わしている登校拒否、親や先生を殴る等の事件も起こらないのではないかと思います。まあ、今になってみれば私の人生にとって教訓になった軍隊生活だったと思っています。

輻重兵としての一期の検閲が漸く終了し、ホッとする間もなく中卒のため幹部候補生教育のため東寧に派

遭されましたが、両手が凍傷にかかり陸軍病院に入院させられ、教育を受けることなく病院を退院した時は教育が終了していたという面目ない形でしたから甲幹になれる筈がなく、東寧に来て一ヵ月後、乙幹として原隊復帰を命ぜられた始末です。

その頃の関東軍は南方に抽出された部隊の補充のため、転属、改編が相次いで行われ、戦友もバラバラになるケースが多かったです。

私も昭和二十年七月末、琿春の西方にある敦化に新設された第一三九師団の工兵第一三九連隊に転属を命ぜられました。着いてみたら兵隊のほとんどが吉林省敦化地区の現地応召の民間人ばかりで、これは大変な部隊にきたもんだと嘆きました。装備も不完全で教育にもこと欠きました。家族持ちが多いですからどうしても気の毒だとの気持ち先になりました。そうして運命の八月九日を迎えたわけですからその時の混乱した気持ちは御想像に任せます。

ただ私が今日こうしてお話が出るのも転属が日ソ開戦わずか二週間前だったからですものね。琿春にあ

のままいたら間違ひなく死んでいます

幸か不幸か北朝鮮、ソ連と国境を接した琿春の原隊から転属を命ぜられて、満州のほぼ中央部の敦化に移ったため、ソ連軍の不法侵入の直撃から逃れることができたのですからね。

復員後、生き残りの戦友から聞いた話ですと、琿春の密江畔でのソ連軍戦車との激戦により多数の戦友が死に、尾形隊長（大尉）は手榴弾で自決されたとのことです。生死は紙一重の境と言いますが、戦死された方の御冥福を祈ります。

終戦を迎え昭和二十年十月、准尉が指揮する一千名単位が「ヤボンスキートーキョーダモイ」と言うソ連軍の合言葉で貨車に乗せられ、ハルビン、満州里を通り過ぎ、西へ西へとシベリヤの曠野を進み、バイカル湖を有蓋貨車の小さな窓から眺めながら一ヵ月かかって着いた所が雪で真っ白なイルクーツク州タイセットでした。

いくつかの収容所があるようでした。第十八収容所でしたから十八番目の収容所だったのでしようね。

「作業はどんなことをさせられたのですか。」

作業は先づ除雪から始まり、森林に入って木材用樹木の伐採作業、つづいて伐採した丸太を使つての建築作業、さらにシベリヤ鉄道のローカル線新設のための盛土、切土作業等、多種多様でした。

私は十九年兵ですから年も若く、酷寒零下三五度から五〇度にも下がるシベリヤで、強制労働と貧しい食事にも耐えられたけれど、終戦直前に召集された年老いた補充兵の方々は、寒さと栄養失調と強制労働に耐えられず多くの人が亡くなりました。家族の消息を案じながらの死出の旅ですから本当に可哀想ですね。敗戦という屈辱に初めて出合い、満人、ソ連人に馬鹿にされ、結婚、食欲（腹一杯食べること）、帰りたいという欲望の中で、一日も早く日本に帰りたい願いが最も強い毎日でした。

毎月一回、日本の軍医と女のソ連軍医が二人して身体検査を実施され、三段階に区別されました。一級と二級に選ばれると重労働に従事させられ、三級になると軽作業（主として収容所の屋内作業）に従事させら

れるのです。

私も始めのうちは重労働ばかりさせられましたが、だんだん体力が低下し、遂に三級になり、入ソして約二年にして漸くダモイ組に入ることができ、昭和二十二年八月十二日に舞鶴に帰国できました。

乗船は「信濃丸」でした。船尾にひるがえる日の丸の旗がなつかしく思えましたね。

私も六十歳の後半となり、老夫婦、長男夫婦、内孫二人の計六人家族ですが、先祖代々の浄土真宗の教えを戴き、心のよりどころにしている今日この頃ですが、満州、シベリヤで亡くなった人々の御冥福を祈って、私の戦中戦後の想い出話を終わりとします。